

②あなたは今日、私と共にパラダイスにいます！

■イエスさま、私の名前を覚えていてください！

最近ある方の臨終に立ち会うことになった。まもなく召されようとしていたが、まだ救われていなかった。身も心も苦しんでおられたが、医療処置以外誰も助けることができないう状態だった。私は死を間近にしたこの苦しみのひとつは「自分が死後、どこに行くか分からない苦しみである」と思った。そして、私にはひとつの確信があった。「私たちには“主イエス”の名前が与えられている。今こそ、この名前を提供すべき時である。天国の入口の鍵を差し上げるべき時である」と。家族と親族がそばにおられ、少し気が引けたが、勇気をもって「Mさん、イエスさまを信じて天国に行きましょう！」手を堅く握って話すと、大きな目でじっと見つめ、強く握り返してくださった。それで「Mさん、今、心のうちでこのように念じるだけで良いのです」と語りかけた。すでに臨終の時が迫っており、耳は良く聞こえたが、もはや口はきけない状態だった。手を堅く握り、目を合わせ「イエスさま、Mです。私の名前を覚えていてください。よろしくお願ひします。アーメン！」(ルカ23:42)と念じてください、と語りかけた。その時、きらりと眼光を光らせ、強く手を握り返された。そこで、私は左手に水を含ませ、その手を額に置き祈りをささげた。「神様、このMさんを天国に迎え入れてください。天国にて私たちと再会できるようにしてください。

アーメン！」Mさんは、阪神大震災から14年目、1月17日の朝、エンジンの停止した飛行機が川面に滑走するかのように、静かに息を引き取られた。

■人間は死後、どうなるのか？

それで、人間は死後、どうなるのか。聖書の要約であり、小さな“組織神学書”である『ウエストミンスター信仰告白』第32章1項には「人間のからだは、死後ただちにちに帰る。朽ち果てる。しかし彼の靈魂は(死にもせず、眠りもせず)不死の本質をもっている。直ちにそれを与えられた神に帰る。義人の靈魂は、その時に完全にきよくされ、最高の天に受け入れられ、そこで、彼らのからだの全き贖いを待ちながら、光と栄光のうちに神のみ顔を見る。また悪人の靈魂は、地獄に投げ込まれ、大いなる日の裁きまで閉じ込められ、大いなる日の裁きまで閉じ込められ、そこで苦悩と徹底的暗黒のうちにあり続ける。聖書は、からだを離れた靈魂に対して、これら二つの場所以外には何も認めていない」とある。

■神の国とは、どのようなところなのか？

さて、私たちが迎え入れられる神の国とはどのようなところなのか。神の国についての聖書の教えは複雑で豊かであり、それは二重の事実の中にある。神

の国は現在の事実であり、しかも未来の祝福である。それはまた、内面の、靈的、贖罪的恵みであって、新生を通してのみ体験することのできるものであるが、また世界の国々の統治とも関わりがある。神の国は、人々が現在そこに入ることのできる領域であり、同時に、彼らが未来において入る領域でもある。それは未来において神から与えられるものでありながら、しかも現在受け取られなければならない神の賜物である。

■神の国はどこにあるのか？

また、私たちが死後迎え入れられる神の国はどこにあるのか。新約聖書の中で、神の国の三つの次元をみる。つまり神の国は、私たちの“中”(現在の)に、私たちの“前”(未来的)に、私たちの“上”(超越的・彼岸的)に、三つの次元で存在している。人間の死、靈魂と肉体の分離、不死の靈魂の召天を「あなたは今日、私と共にパラダイスにいます！」(ルカ23:43)の御言葉にしたがい、神の国の超越的・彼岸的次元の中に見ていくとき、先に召天された方々は、昇天されたキリストと永遠にとともにある。

主はそこから聖霊を注いでくださっている。ペンテコステの聖霊の恵みは、未来の「後にやがて来る世の力の味わい」(ヘブル6:5)であり、超越的(彼岸的)領域からの前味(黙示21:3,4)なのである。